

1 次資料デジタル化の効率化手法を応用した 成長型ドキュメンテーション作成研究

Bグループ： 映像資料

富田美香（映像学部）

はじめに

本グループでは、映像文化資源の蓄積、映像アーカイブ手法の洗練を目的とし、以下4項目を対象に設定して研究活動をおこなった。

- (1) アート・リサーチセンター収蔵品の内、映像文化のノン・フィルム・マテリアル研究資源のデジタル化蓄積、Web閲覧システムによる公開。
 - (2) アート・リサーチセンター収蔵品の内、映像文化の動的映像研究資源（フィルム、ビデオ）のデジタル化蓄積、上映による公開。
 - (3) ノン・フィルムおよびフィルム・マテリアルのデジタル化手法について国内外の調査。
 - (4) コロンビア大学東アジア図書館所蔵のノン・フィルム・マテリアル研究資源の調査。
- これらの研究成果を以下に記す。

1. ARC所蔵ノン・フィルム・マテリアルについて

本研究の成果を大別すると、①明治期および大正期の京都日出新聞に掲載された映画興行記事のデータベース作成とその公開ならびにデータベースの更新、②1950年代から70年代までの映画興行専門誌『合同通信』のデジタル化とそれを用いた映画史研究会の活動、③マキノ関係資料（スチル、雑誌、作品、人物情報等）のデータ更新および国内所蔵調査、④京都映画人オーラル・ヒストリーの収集と調査、がある。

①は、日本に映画常設館が開設されていく時期の1908-1909年と、大正期のもっとも映画興行が盛んになった1919-1921年を対象に、京

都日出新聞に掲載された映画興行記事を収集し、データベース化を行ったものである。1908-1909年のレコード数は1603件、1919-1921年は9328件であり、これらのデータベースは、パスワード管理によるWeb閲覧システムで研究者用に公開（<http://www.dh-jac.net/db6/hinodem/search.htm>、www.dh-jac.net/db6/hinodetaisho/hyoshi.htm）し、データの更新も毎年おこなっている。

②の『合同通信』デジタル化に関しては、国際日本文化研究センターとの共同研究で2012年度から2013年度にかけておこなった。『合同通信』は、映画興行館に配布される通信誌であり、1950年代から欠号なく揃えて保存している機関はARCのみという、貴重な資料である。映画の広告記事も多いため、権利上の問題からデジタル・データの公開は難しく、本プロジェクトでは国際日本文化研究センターや国内の映画史研究者とデータを共有しながら、本誌を読解する研究会を組織し、国際日本文化研究センターにおいて開催した。この研究会は2014年度以降も規模を大きくして継続する予定である。

③の成果発表については、2009年に開催された京都国立近代美術館展覧会『「前衛都市・モダニズムの京都」1895-1930』での展示および講演会と、日本の映画ファン雑誌を復刻する初めての試みとなった『戦前期映画ファン雑誌集成 第一期マキノ』の復刻発行（ゆまに書房）がある。この復刻は、本プロジェクトの研究成果である国内所蔵調査をもとに、代表者の監修によって2013年から二年がかりで全28巻刊行するものであり、紙媒体で復刻

することで国内外の日本映画研究拠点機関に収蔵されることとなった。

④は、収集した京都映画人オーラル・ヒストリーの調査をもとに、日本における色彩映画とカラーフィルムに関する調査を深め、論文等で発表をおこなった。

これらの研究成果を通して、さらなる資料の発掘や、専門機関との共同研究を推進するなど、マキノ映画や京都映画のアーカイブおよび研究拠点としての対外的評価を高めることとなった。

2. ARC所蔵の動的映像研究資源(フィルム)のデジタル化蓄積、上映による公開

所蔵フィルムは、戦前京都の映画撮影所やロケーション撮影映像等の貴重な映像であり、9.5mm、16mmといった小型映画のホーム・ムービーである。これらのフィルム・マテリアルの保存およびデジタル化手法について国内外を調査し、35mmフィルム化と35mmからのデジタル化を実施した。国内は、東京国立近代美術館フィルムセンター、京都府京都文化博物館、神戸映画資料館などの代表的なフィルム・アーカイブ、および東京光音、イマジカウエストといったラボを中心に、国外は、韓国映像資料院、ジョージ・イーストマン・ハウスを調査し、デジタル化した映像の上映・公開は、京都府京都文化博物館、東京国立近代美術館フィルムセンター、神戸映画資料館において講演つきでおこなった。また、ブカレスト大学（ルーマニア）、コロンビア大学（アメリカ）、漢陽大学（韓国）でも、これらの映像を提示しながら小型映画に関する講演や発表をおこなった。これらの活動をもとに、国内の主要アーカイブとその連携機関の専門家による講義「映像アーカイブ」を立命館大学と京都大学コンソーシアム授業として開講し、社会人を含めた100人程の受講生を毎年輩出している。これらの活動については、京都新聞、日経新聞等にとりあげられ、一般の関心を高める契機ともなった。

3. ノン・フィルムおよびフィルム・マテリアルのデジタル化手法について国内外の調査

ノン・フィルムについては、撮影台本のデジタル化について、国内のフィルム・アーカイブや、東京大学で進めている脚本アーカイブの調査をおこなった。フィルム・マテリアルについては、小型映画を対象に、国内のフィルム・アーカイブや韓国映像資料院、ジョージ・イーストマン・ハウスの調査をおこなった。

撮影台本については、調査を反映しながら、黒澤明の『羅生門』で有名な宮川一夫撮影監督の撮影台本のデジタル化を、著作権者の映画会社、シナリオ作家協会、宮川家の協力を得て2013年度に実施した。その際、対象とする撮影台本には書き込みや資料の貼り込み等が多数あるため、それらの複雑な権利問題についても、日本シナリオ作家協会や各映画会社と連携しながら調査をすすめた。当該資料のデジタル・データも権利問題上、公開することは難しいが、アーカイブ内での閲覧を前提に共有する予定である。これらデジタル化および調査結果については、京都文化博物館にて報告会をおこなった。

小型映画の調査結果については、論文で報告をおこなっている。調査活動を通して、日韓映画史に関する共同研究プロジェクトをたちあげ、漢陽大学、慶熙大学、韓国映像資料院の研究者と研究交流をおこなった。また、ジョージ・イーストマン・ハウスでの調査結果により、ジョージ・イーストマン・ハウスに所蔵されている1920年代の日本を撮影した小型映画を8本見出すことができた。現在は、これらの復元プロジェクトの計画を、ジョージ・イーストマン・ハウス、東京国立近代美術館フィルムセンター、ロチェスター大学との共同研究で進めている。

4. コロンビア大学東アジア図書館所蔵のノン・フィルム・マテリアル研究資源の調査

海外に移管された、日本人コレクター・映

画史家 牧野守氏による映画資料群（コロンビア大学東亜図書館所蔵「牧野守コレクション」）の一部をデジタル化するための予備調査をおこない、コレクション概要の把握、特に戦前資料の量的質的把握をした。これらの調査成果を、コロンビア大学文学部と東亜図書館と共催のシンポジウムで発表した。

以上、本プロジェクトでは権利問題の関係上、クローズド形式でのデータ共有となることが多いが、これらの研究および成果発表をもとに、日本映画・文化研究者やフィルム・アーカイブなどの海外研究機関、とりわけ連携を強めているコロンビア大学東アジア言語文化学部および図書館、ストラスブール大学およびCEEJA、韓国映像資料院との研究交流は年々深まっており、十分な成果をあげたといえる。